

2006-2-①

東京工業大学大学院社会理工学
研究科価値システム専攻教授
橋爪大三郎 先生



**大学とは学問を
突き詰めるところ**

大学は、高校までで教えられたことを入り口にして、学問を突き詰めて考える場です。「原理から考えるとこうなるだろう」というところまでとどまってしまうというのでは「本物の勉強」をしていないとは言えません。「理論的にはこうなる。今ここで実験をしてみるとこのようになるはずだ。ただ、その際の条件は2つある」などと実際に行うにあたって発生する様々な条件を考

**「将来どんな仕事を
したいか」を自分で決める
勇気を持つ**

大学で学部を選ぶときに考えておいてほしいのは、将来どんな仕事をしたかということ。大学は、卒業後に企業や研究機関の一員として、あるいは弁護士などの資格を持った職業人として「働く」ことを前提に学ぶ場だととらえてほしいです。めざす仕事が決められないという人



**志望理由を考えたら、
形に残しておく**

入試本番できみらしさをアピールするためにも、考えた志望理由はきちんと形に残しておこう。今月の添削課題は「大学で学ぶことの意義」、「科学技術と日本社会」の2本。どちらもきみの考えたことをきみ自身の言葉で形に残しておくことができる。ぜひ取り組もう。

2006-2-②

受験生の皆さんへ

志望理由を固めるにあたってのメッセージ

志望理由をまとめるときに意識しておいてほしいことを東京工業大学の橋爪先生が語ってくれた。すべての学部系統に共通することだから参考にしよう。

**大学とは学問を
突き詰めるところ**

大学は、高校までで教えられたことを入り口にして、学問を突き詰めて考える場です。「原理から考えるとこうなるだろう」というところまでとどまってしまうというのでは「本物の勉強」をしていないとは言えません。「理論的にはこうなる。今ここで実験をしてみるとこのようになるはずだ。ただ、その際の条件は2つある」などと実際に行うにあたって発生する様々な条件を考

えて語ることができて、初めて「本物の勉強」をしていると言えます。大学では、ここまで学問を突き詰めていきます。高校生のときから、テストのための勉強や受け身の姿勢ではなく、真剣に学ぶこと、それが土台になります。

**「将来どんな仕事を
したいか」を自分で決める
勇気を持つ**

大学で学部を選ぶときに考えておいてほしいのは、将来どんな仕事をしたかということ。大学は、卒業後に企業や研究機関の一員として、あるいは弁護士などの資格を持った職業人として「働く」ことを前提に学ぶ場だととらえてほしいです。めざす仕事が決められないという人

東京工業大学大学院社会理工学
研究科価値システム専攻教授
橋爪大三郎 先生



**志望理由を考えたら、
形に残しておく**

入試本番できみらしさをアピールするためにも、考えた志望理由はきちんと形に残しておこう。今月の添削課題は「大学で学ぶことの意義」、「科学技術と日本社会」の2本。どちらもきみの考えたことをきみ自身の言葉で形に残しておくことができる。ぜひ取り組もう。

予測通りなら……

二十一世紀がスタートして、六年が経過しようとしている。この世紀は、いったいどんな百年になるのだろうか。前途を楽観できない、懸念材料がいっぱいある。地球の人口がどんどん増えている。まもなく一〇〇億人を突破し、一五〇億人になるかもしれない。いっぽう、食糧の増産はままならない。先進国と第三世界の格差は、かえって拡大している。エネルギー資源は、石油も原子力も、いずれ底をつく。地球温暖化など、環境破壊も進んでいる。一九七二年の『ローマクラブ・レポート』は、二十一世紀の半ばに人口や工業の伸びがピークに達したあと、大幅な人口減少と経済の崩壊が起ると予測していた。それから三十年あまり、だいたいその予測通りに進ん

東京工業大学「世界文明センター」設立

人類の希望と繁栄のために

人類の歴史は、誰かが書いた筋書き通りに進むわけではない。歴史の行先を知らない大勢の人間が、ばらばらに行動している。結果として、文明がどうあるのか、研究しなければならない。

日本の知性を結集して 羅針盤としての役割を

東京工業大学「世界文明センター」副センター長 橋爪 大三郎

文化

ければ、ひと目には、孫やその子やその孫たち、つまり百年後の人類だ。私たちは、将来の世代に対して、責任がある。これまで多くの文明が栄えては、滅んでいった。私たちの文明がその二の舞にならないためには、文明がどうあるのか、研究しなければならない。

センターのめざすもの
東京工業大学では今年、春「世界文明センター」をオープンした。このセンターは、科学技術の最先端の成果が、確実に人類の幸福に役立っている。そして、二十一世紀の文明が、人びとに希望と繁栄をもたらすものになるように、研究と

メリカ的生活様式を、世界標準にしたい。いけないのだ。世界は日本を見習うべきである。

第二に、日本の食文化。大豆製品や魚類をよく食べる日本人は、長寿で健康だ。どの国も豊かになると、肉食が増える傾向があるが、ウシやブタに飼料作物を食わせるので、食糧のムダになる。肉なしで料理をおいしく食べてきた日本食の経験が、世界に普及させるべきだ。

所得が上昇し教育が普及すれば、人口増加にブレーキがかかることが知られている。日本の海外援助は、第三世界に学校を建設し教員を養成する、教育援助に集中すべきだ。

このように、世界の科学技術をリードする日本が、二十一世紀の人類文明のためにできることは多い。東工大の世界文明センターは、これからさまざまなアイデアを出していこう。手遅れにならないように、人類と地球が救われることを祈りたい。

理

系と文系がはっきり分かれているのが、日本の大学のまずい点である。

理系は実験設備に金がかかる。それなら数学の試験をして、人数をしばらく。財政難の明治国家が考えた苦肉の策である。それが当たり前になって、誰も怪しまなくなっている。

これがハーバード大学なら、学部生は全員FAS（アート・アンド・サイエンス学部）に入學する。数学も歴史も、物理も哲学も、何でもありで、どの講義をとってもいい。専門は大学院でじっくり勉強してね、という仕組みなのである。専門をどう区切ろうと、現実

の問題はそんな区切りと関係なく、ひとつながりだ。専門の垣根を気にしない旺盛な好奇心がものを言う。そういう越境する知を後押しする、教養教育の応援団があってもいいじゃないか。東京工業大学（私の勤め先）はそう考えて、この春、「世界文明センター」をスタートさせた。理工系大学のと真ん中に、芸術文化の香り漂うオアシスのような場所ができた。

敗戦直後、東京工業大学に偉い先生がいて、「科学者であるわれわれは、芸術・文化・哲学を真剣に学ばなかったせいで、非合理主義に走り、国を誤った」と反省し、教養教育に力を入れた。宮城音弥、川喜田二郎、鶴見俊輔、永井陽之助、永井道雄、伊藤整、江藤淳といった、そうそうたる顔ぶれが集まったのはそのおかげだ。

昔の夢よう一度、なのではない。いまの時代には、新しい科学者の任務がある。それを導くのが、世界文明センターである。

考えてもみてほしい。地球の人口は六十五億人。化学肥料や自動車やコンピュータなしで、これだけ大勢の人間が生きられるだろうか。工業力なしに人類はもはや生存できないのだ。

工業は、資源やエネルギーを大量消費する。それでも、世界中の人びとを

豊かにするには、とても足りない。第三世界の人びとは、豊かになりたいと思う権利があるし、そう叫ぶ自由もある。でもあと十億人が、先進国並みの暮らしをしようとするだけでさえ、地球環境は破壊されてしまうだろう。環境を守らねばと、工業に反対するひとがいる。先進国の甘えだと思おう。自分はエコライフで満足かもしれないが、六十五億人の全員がその真似はできない。何十億人かは死んでくたさい、と言っているのと同じだ。

技術は、有限の資源を有効に用いるためのもの。科学は、その新しい技術を可能にする。省エネ技術を駆使し、肉の代わりに大豆や魚類をおいしく食べるのは、日本の伝統だ。エネルギー消費は、アメリカに比べて約半分。「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」をやめて、世界中が日本を見習えば、同じ資源で二倍の人びとが、先進国並みの生活ができるのである。

湧き出る、世界文明のオアシス。

随筆

橋爪大三郎

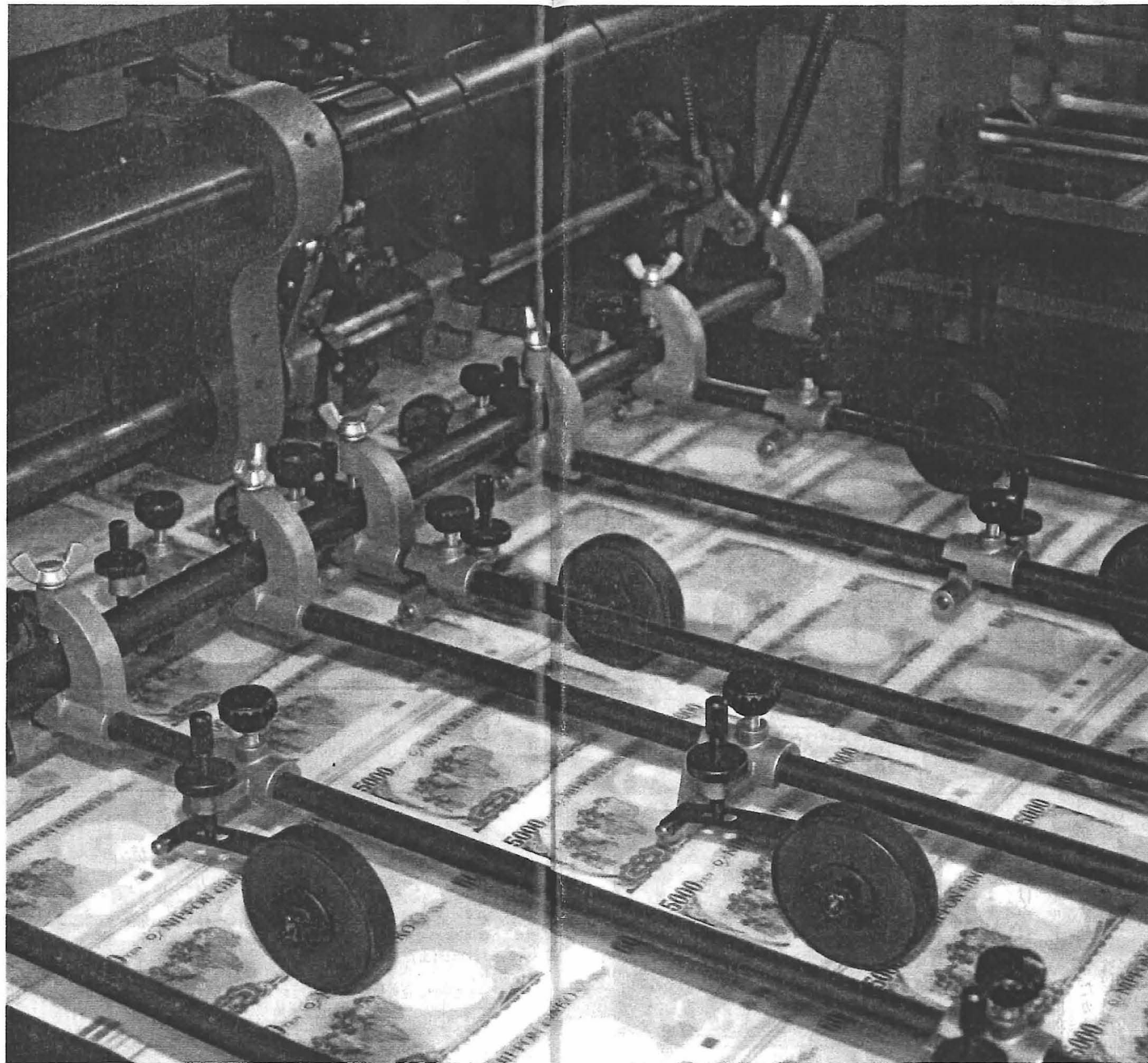
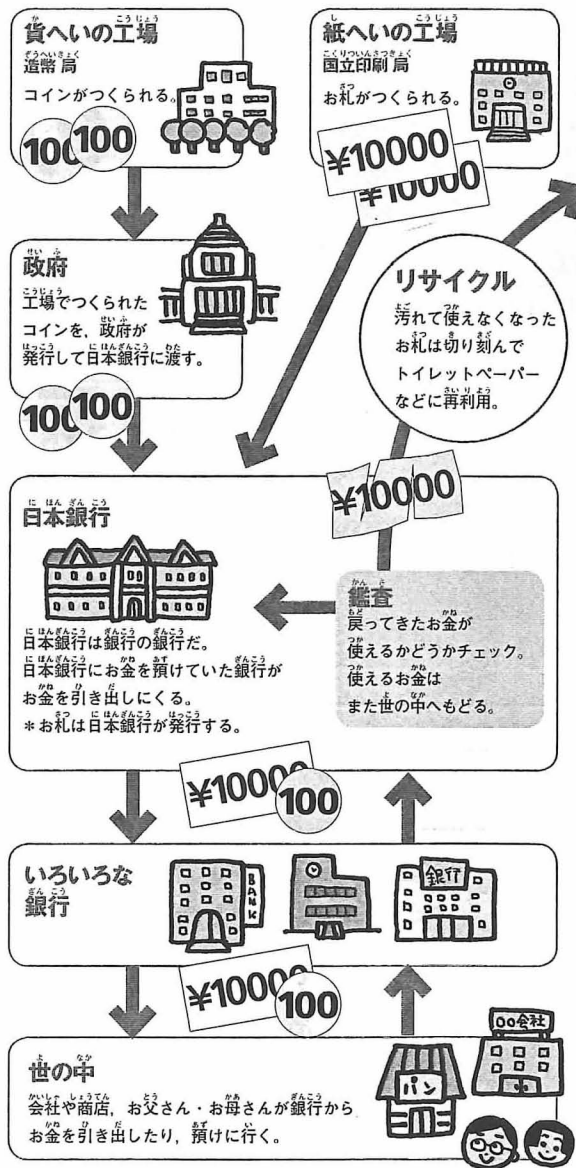
社会学者

text by Daisaburo Hashizume
はしづめ だいさぶろう 一九四八年神奈川県生まれ。東京大学文学部卒業。同大学院博士課程（社会学専攻）単位取得退学。現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科教授（社会学）。主な著書に『言語ゲームと社会理論』『天皇の戦争責任』『はじめての構造主義』『世界がわかる宗教社会学入門』『永遠の吉本隆明』などがある。



たメソポタミア。奴隷労働に依存して崩壊したローマ。二十一世紀の人類が似たようなことにならないために、過去の文明が教訓になる。世界文明センターは、羅針盤となって、世界の科学者にその使命を思い起こさせるのだ。

お金はどこでつくられているのかな？

新しくつくられたお金は、
どうやって私たちの手元に届くのだろうか。

紙へい(お札)は国立印刷局でつくられるよ。この写真は印刷機が5000円札を印刷しているところ。

お金をいっぱい 配らないのはなぜ？

お金は、だれかがどこかでつくっているもの。だったら、いっぱいつくってみんなに配れば、
おごつかも知れなくなるかもしれない。そんなこと考えたことはないかな？ 今回はその不思議をさぐってみよう。

大切に必要だけど、とても不思議なお金の話

も少ない。だから価値があるんだね。ところが、だれかが最強のカードをたくさん印刷して、みんなに配ったらどうなる？ そのカードはだれでも持っているから、もう最強のカードじゃなくなってしまうんだ。つまり、価値が下がったということ。

お金もそれと同じ理屈だよ。お金を配るとお金の量が増えるから価値が下がるんだ。今の2倍お金を配れば、価値は2分の1になる。同じ物を買うにも、倍のお金が必要になるんだ。

お金が配られて、きみのおこづかいが500円から1000円に増えたとして。きみは「よし、これで欲しかった1000円の本を買うぞ」と書店に行く。ところが、お金の価値が下がっているから、その分、本は値上がりして2000円になっているんだ。きみが持っているのは1000円だから、その本は買えない。結局、お金を配っていないときと同じ状態になるんだよ。

それから、お金が配られたら、働かないでいいやとパン屋さんはパンをつくるのをやめ、ゲーム工場の人にもゲームをつくるのをやめちゃうかもしれない。そうなったらお金があっても買う物がなくなってしまうよね。だから、お金をみんなに配ることはしないんだよ。

【協力】金融広報中央委員会

仮に1万円札をいっぱい印刷して、みんなに配ったとしよう。そうすると、どうなると思う？ 「みんなお金持ちになって好きなものが買える！」って思ったかな？ ところが、残念ながらそうはならないんだ。

今の2倍の量のお金を印刷してみんなに配ると、不思議なことに物の値段が2倍になってしまふ。なぜ、物の値段が2倍になるのだろうか？ それは、お金の価値が2分の1に下がるからなんだ。

この説明だと難しくてよくわからないね。じゃあ、みんながよく知っているキャラクターのカードゲームを例にとって考えてみよう。カードには、強いカードと弱いカードがあるよね。最強のカードは数がとって

答えるオトナ

橋爪大三郎

オトナの人に
質問！

大人と子どもは何がちがうの？
どうなったら大人なの？
大学で社会学を教えている
橋爪先生に答えてもらったよ。

自分のこと

だけじゃなく

ほかの人にも
責任を持つ人

大人とは、まず、自分のことが自分でできる人です。料理ができた、洗たくができた、そうじができた、働いて自分で生活できる人ですね。それから大人というのは、自分のことだけをしていてではなくて、ほかの人たちにも責任を持つ人たちです。

でも子どもは、まだ自分のことも一人ではできません。大人といっしよの家に住んで、ごはんをつくらしてもらいます。それに、働かなくて

もいいですし、大人からおこづかいをもらいます。じゃあ、大人の世話になるのは、ほしくないことなのでしょうか？ そんなことはありませんね。自分でやろうと思ってもできないことが、

子どもにはたくさんあります。大人だって、自分では何もできない赤ちゃんから始めているのです。それから人間はだれでも年をとります。目が見えなくなったり、体の調子が悪くなったりして、自分のことができなくなることもあります。こういうときに、できない部分を人に助けてもらうのは、ほしくないことでもなんでもありません。みんな年をとるんだからね。



病気になるって人の世話になるのはほしくないことじゃありませんね。

病気になるのはいけません。でも、本人が健康でいたいのに病気になる、事故にあったりすることがあるでしょ。だれにでも起こりうることだね。だからできなくなったことをだれかにやってもらうことは、恥でもなんでもない。

でも自分でできることは、子どもでも、年をとっても、病気になるっても自分でやります。例えば、目が見えなくなったら、ほかの能力で自分に何ができるか考える。耳は聞こえる、話すこともできる、考えることもできる。それをほかの人のために使えば、とても立派なことだね。

では、子どもは大人の世話にならなから、何をするのかという、大人になるための準備をするんですね。自分のことができるように準備する。自分以外の人たちの役に立つことができるように準備する。そのためにきみが通っている学校があります。学校に行かないで子どものうちから働いてしまうと、大人になる準備ができません。

でも、子どもを学校に行かせないで働かせていた時代もあったんだ。例えば、石炭を採る炭坑の仕事は子どもにさせていました。石炭を採る

ための穴は小さかった。大きな穴をつくるよりも小さい穴のほうが人手

がからず安くてできるからだね。その小さな穴に入って石炭を採るには、体の小さな子どもを使うのが都合よかったんだね。はしごを使って穴の下に子どもを下ろすと、決められた仕事が終わるまでそのはしごをはずして外に出られないようにしていたんだ。そんなことをしていたら、体の発育もとまってしまふ。だから、こういうことはその後、禁止した。子どものときには、読み書きや計算の練習をして、絵を見たり、音楽を聞いたり、いろいろな経験をさせようと思ったんだ。

子どものために

大人がつくった

子どもの時間

子どもは働かせないで、学校に行かせる。そして大人になってからゆつくり働いてもらうことにしたんだよ。今のきみたちの時間は、子どものために大人が一生懸命に考えてつくった時間なんです。そういう時間なんだから、有効に使ってほしい。例えば、サッカーが

好きな人はサッカーをやればいい。でもサッカーだけじゃ、やっぱりまづい。国語や算数、理科、社会、きらいな科目があっても勉強しなう。大人になる準備は、食事と同じです。おいしい物だけ食べればいいのかっていうと、そうじゃない。栄養も必要だね。でも栄養だけでいいかといえ、やっぱりおいしくないといつまらないでしょ。

自分のことが自分でできて、ほかの人の役に立てるようになったら、大人です。そして、この二つが、楽しくできて、得意なことだったら、なおいい。何をしたら楽しくできるのか、ゆつくり考える必要がありますね。得意にするためには練習も必要ですね。何でも大人と同じことをしようと思わないで、子どものときにやるべきこと、子どもとしてできることをしっかりとやってください。それが大人になる準備なんだね。



橋爪大三郎さんってどんな人？

●1948年、神奈川県生まれ。
東京工業大学の大学院の教授で、学生に社会学を教えている。社会学というのは、社会で起こっているできごとや変化を調べて、どうすれば人々がよりよく生活できるかを考える学問だよ。

きみたちにはまだ難しい内容だけれど、

『隣のチャイナ』(夏目書房)。

『幸福のつくりかた』(ポット出版)。

『選択・責任・連帯の教育改革』(完全版)。

学校の機能回復をめざして』(共著・勁草書房)など。

本もいっぱい書いていますよ。

橋爪大三郎教授

しまっただすね。たしかに学生が実力行使したのは良くないかもしれないけれど、もともと自治会を通して処分撤回を要求しているのに、それを無理やり押しつぶそうと、機動隊を入れるとは何事か、ということと東大中が激怒して大騒ぎになってしまった。

授業がなくなったのはその日からです。私は教養部の二年生だったのだけど、授業を受けようとして学校に行くと、自治会やいろいろなセクトがマイクを保持して「今日機動隊が入りました」と騒いでいる。もしかしと大学側が非常ににもたしていて、なかなか解決に向かわない。そうすると学生も、強く出るをえなくなりますバリケード無期限ストをするとかしなるとか、無期限ではなくて一ヶ月にするとか、学部ごとに決めるわけです。私がいた教養部では無期限ストをすることに決まって、クラスでくじ引きをして教室の見張りをしました。全共闘はみんな素人なんです。ある日突然運動が始まっ



【生】 1948. 10. 21
【学歴】 1972. 東京大学文学部社会学科卒業
1977. 同大学院博士課程
単位取得満期退学
【職歴】 日本学術振興会 特別奨励研究員
【専門分野】
理論社会学、宗教社会学、現代アジア研究

【生】 1
【学歴】
【職歴】
【専門分野】
理論社会
を考えてみてくだい。字でほしい。理工系の分野はいるという確実さがあるわけだから、それ以上確かなことはないと自信を持つべ

ないと長続きしませんからね。そして東大に進学したのですが、全共闘の一件もあり、東大のことが心底嫌いになりました。だからこのまま大学院に進学していいものかと迷ったのですが、せっかく社会学をやるために入ってきたのに、大学とケンカしたぐらいで志を曲げてもよいものかと。それにやめたとしても他にやることもないし、そもそも大学院には私がいるべきであって、いまの教授たちにいる資格はないと思っていたので、あえて進学しました。

——東工大に来た経緯を教えてください。

大学院を出たのはいいけれど、東大の先生と仲がよくないわけだから就職なんてあるわけがないんです。それで、アルバイトをしながらあちこちの公募に落ち続けていたところ、たまたま東工大に就職が決まりました。当時としては少し遅めの就職でしたが、いまでは普通でしょう。文系の大学院を出ても研究者になれる可能性は極めて低いです。理系はそんなことはいけれど、文系の場合一生ブタローでもおかしくはない。特に最近、文系の大学院生の人数が何倍にも増えましたから、修士号や博士号を持ったまま、ほとんどの人が社会で働かなくてはならない。企業、官庁、大学を、博士号を持った人間が渡り歩くというのが、これからの正しい姿でしょう。

——文系の研究者を目指すことに關して、学生時代に不安はありましたか？

小説家や画家になることを考えてみてください。字は誰でも書けるわけだから、実は小説なんて誰にでも書けるわけですね。でもないと長続きしませんから日本に小説家が何人必要かを考えると、おそらく百人以上でも全員は食べきれないでしょう。同年齢に直すと、三人ぐらいです。この三人の中にもぐりこもうと思つたら、結構大変ですよ。それでも「継続は力なり」でやめないでやって行く。でもやめないですつとやっても駄目な人もいます。シビアン世界です。だから駄目な人は早くやめたほうがいいということになる。

私の場合、当時支配的だった理論がデタラメだと思つていたら、自分で考えた論文をコピーして周りに配つたりしていた。だから私が社会学と称してやっていたことは、当時社会学でもなんでもなくて、既存の理論とまったく違うことをやっていたわけだから、完全に無視されて認められなかった。不安かといえ、不安だが、しかし、そんなことに負けていてはいけない。若い人の良いところもあり、悪いところでもあるのは、先のことをあまり考えないのです。皆さんの三十歳の自分なんて想像しなくないでしょう。私が学生のときは三月先のことしか考えなかった。まあ、たしかに長期的な目標みたいなものはありましたけれど、それよりは、目の前のことに集中していた。山登りでも、一步一步踏みしめて登っていくでしょう。それと同じです。

——東工大の学生をどう思われますか？

みなさん真面目でとてもいいと思います。ですが、多少不器用なところがありますね。もつと自信を持っています。理工系の分野は、きちんと研究できれば世界で通用するんです。ちょっと英語が下手でも、実力次

第でどこにでも行くことができる。文系の場合は、言語の壁や文化の壁があるので行く、簡単によその国に行つて通用しません。しかし、理系は研究室でやっていることがそのまま世界で通用する。だから自信を持って積極的に頑張つてほしいと思う。

私が学生だったころに感じたのは、世の中はもう完全に出来上がっていて、これから自分がやることなくあるのだろうか、ということでした。今思うと不思議でしょう。そのころはパソコンもなかったし、地下鉄なんか丸の内線と銀座線ぐらいいしかなかった。変化の余地なんていくらでもあったわけです。いまの若い人にしても、現代の社会を眺めてみると、いまの状態が歴史の最先端の状態なわけだし、大人たちがびびりながら、自分を出る幕なんてあるだろうかという感覚に襲われるかもしれない。でも、大昔からそうだったのです。この感覚に騙されてはいけない。私は若いころ、「大人」というのはもつと大人らしくしつつありいていると思つていたけど、ここ十年つくづく思うのは、人間というのは感情の動物で、つまらない感情にいつも振り回されている。大人だって子供と同じなんです。人間は、経験は積んでいくかもしれないけど、「成熟していく」というものではなく、やらない。だから、若い人たちは愛に氣後れる必要はないということが教訓としてはわかつたんですね。偉いけど、日々こつこつやっていると、いつか確実さがあるわけだから、それ以上確かなことはないと自信を持つべきなんです。